

太宰治著述一覽稿(Ⅰ)

— 自大正十二年至昭和七年 —

山 内 祥 史

凡 例

〔翻印状況の記録〕

一、太宰治の小説・戯曲・随想・評論・書評・文芸時評・雑記・俳句・編集後記・序文・後記・解説・作文・日記・アンケート回答・創作ノオト等、書簡をのぞく太宰治の記しのかした文章のすべてと、合評記・座談会等における太宰治の発言を記録した文章のすべてについて、その翻印状況を記録した。記録に際しては、左記の形式をとった。

一、まず、太宰治の文章題名をゴシック体で示し、ついで、初出紙誌名・月号、巻号数・発行年月日・所載頁・所載欄・署名、あるいは、初出書名・発行所名・発行年月日・所載頁・所載欄等を記した。

題名表記は、初出によることを原則とし、署名欄は、「太宰治」以外の署名をしている場合だけに署名内容を「」内に示した。

配列は、発表年月日順としたが、太宰治生前に未発表であったものは、推定成稿年月日によって、これにくりこんだ。

一、そのあと、原稿、初出との対照研究、本文校訂の便宜のために、全集に収載されるまでに、当該作品を紹介または収載したものについて、紹介者名・文章題名・所載紙誌名・発行年月日・紹介内容、または、著者名・著書名・発行所名・発行年月日・紹介文章題名・紹介内容、または、筆者名・紹介文章題名・編書名・発行所名・発行年月日・紹介内容等を、発表年月日順に記した。

書籍に収載されたのちに、雑誌または新聞に紹介されたものは、記載を省略した。また、全集に収載されたのちに紹介されたものは、いっさい省略した。ただし、原稿を写真で紹介したもの、註記・解説を付して紹介したものは、すべて記載することとした。

一、その文章の一部が紹介されている場合は、全文が紹介されているものに準じた記述をした。ただし、この場合も原稿が写真で紹介されている場合は、すべて記載することを原則とした。

紹介内容がきわめて短章または断片的であったときは、つぎの、紹介されていないものに準じた記述をした。

一、その文章の存在は判明しているが、一般に紹介されていないものについては、はじめに「未紹介」と記しておいた。

この場合は、その文章の題名をはじめて紹介したもの、または、執筆年月日をはじめて紹介したものだけについて、行を改めずに記載した。

〔同時代評の記録〕

一、当該作品に関する同時代の批評を、当該作品に関する批評の部分だけに限定して紹介した。

紹介に際しては、(1)批評所載文章題名・紙誌名・巻号数・発行年月日、または、批評所載文章題名・書名・発行所名・発行年月日、(2)同時代批評文、(3)註記の順で、それぞれ行を改めて紹介した。

同時代批評文の紹介に際しては、原文での改行は／印をもって示し、改行せずに記した。

一、批評本文が長文にわたるもの、批評本文を容易に見うるもの等については、本文の紹介を省略し、それを紹介、収載した文章題名、紙誌名、書名等を紹介するにとどめた。

一、太宰治の著書に関する同時代評は、別稿「太宰治書誌」（審美社近刊予定）で、順次紹介してゆく予定のため、批評文題名だけの紹介にとどめ、批評本文の紹介はいつさい省略することとした。

一、いまだに入手していないものについては、わかる範囲のことを紹介することにした。

〔付記の記録〕

一、まず最初に、その文章の一部しか紹介されていないものについては、「全文未紹介」と記し、全集に未収録のものについては、「全集未収録」と記した。

一、そのあと、作品それ自体に関する註記事項、初出に関する註記事項、太宰治単独の執筆または発言によってなるものでない場合は、それに関する註記事項等を記した。

一、太宰治が関係した同人雑誌、またはこれに準ずるもの、または作文帳、日記の類に関しては、それに所載した最初の文章の〔付記〕の項に、参考文献の類を發表年月日順に記しておいた。

参考文献の類のうち、雑誌に發表されたものと同文のものが、のちに単行研究書に収載されている場合は、研究書の方だけを記した。

〔文字・区切り符号等の記録〕

一、漢字は、印刷の都合上新字体を用いた。しかし、かなづかいは、原文に忠実であることを旨とした。

巻号数、發行年月日の数字は、すべて漢数字で統一し、所載頁または所載面は、アラビア数字で統一し、年はすべて和暦で統一した。ただし、初出の文末付記に記された成稿年月日の記録の場合は、原文に忠実であることを旨とした。

一、初出の記録の項では、所載欄名と署名とだけを「」で示し、他は符号を使用しなかった。

一、初出の記録以外の項では、つぎのように記した。

紙誌・パンフレット・月報等に所載のもので、(1)紹介者、筆者名が不明のときは、まず「」内に紙誌名等を記し、ついで月号を記し、そのあと()内に、巻号数、特集題名、発行年月日等を記し、(2)紹介者、筆者が明らかなきときは、まず紹介者、筆者名を記し、ついで「」内に関係文章題名を示し、そのあと()内に、「」に紙誌名の類を、つづけて巻号数、発行年月日を記した。なお副題は―で示した。

書籍に所載のもので、(1)単独の筆者による著書の場合は、まず著書名を『』で示し、ついで()内に、発行所名、発行年月日を記し、そのあと「」内に関係文章題名を記したが、(2)数名の筆者による合著ないしは編著の場合は、まず筆者名を記し、ついで「」内に関係文章題名を記し、そのあと()内に、『』に書名を、つづけて発行所名、発行年月日を記した。なお、叢書名は『』の中に()で示し、副題は―で示した。

一、著者が太宰治であるときは、著者名の記録を省略した。

―は一字分、……は二字分に統一した。ただし同時代評本文中の―は、原文に忠実であることを旨とした。

文章題名中に、紙誌名または別の文章題名の類等があらわれたときは、文章題名を「」で、紙誌名または別の文章題名の類等を『』で示すこととした。

新年 予習用読方帳・大正十二年一月十五日記

「八雲」昭和二十三年十一月・二月号(第三卷第十一号「太宰治未発表作品特集」昭和二十三年十一月一日)に、「小品」として、全文が紹介された。

相馬正一「太宰治について」(「弘前高校自治会誌(八十周年記念号)」昭和三十八年十二月)に、「小学生の時の作文の一部」として、冒頭九行分が写真で紹介された。

山内祥史「太宰治全集未収録資料——『予習用読方帳』所載「新年」「牛」——」（『太宰研究』第十七号、昭和四十三年十月三十一日）に、全文が紹介された。

山内祥史「太宰治の小学校時代作文（その2）」（『解釈』第十六卷第二号、昭和四十五年二月一日）に、全文が紹介された。

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「小学校時代の作文——『予習用読方帳』に関する資料・覚書——」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。「予習用読方帳」については、「八雲」昭和二十三年十一月・二月号所載「僕の幼時」「新年」に付された解説、相馬正一「太宰治における作家的資質の問題」（『東奥日報』昭和三十七年六月二十一日）、相馬正一「太宰治全集未収録資料／同人雑誌『青んぼ』細目／『弘高新聞』掲載作品」（『郷土作家研究』第三号、昭和三十七年七月十五日）に付された「後記」、相馬正一「太宰治と金木町——青森県文学散歩(5)——」（『教育広報』第十二卷第六号、昭和三十七年九月二十日）、相馬正一「少年・太宰治」（『新潮』第六十卷第四号、昭和三十八年四月一日）、相馬正一「太宰治について」（『弘前高校自治会誌』八十周年記念号、昭和三十八年十二月）、相馬正一著『太宰治（上）——苦悩の青春——』（弘前市立弘前図書館、昭和四十三年一月一日）、相馬正一著『若き日の太宰治』（筑摩書房、昭和四十三年三月九日）の「性格形成の背景」の章、相馬正一「若き日の太宰治の肖像⑨——文学の芽（その一）——」（『北』第九号、昭和四十三年九月十五日）、山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）の「小学校時代の作文——『予習用読方帳』に関する資料・覚書——」の章、などを参照のこと。

本を借りる手紙・予習用読方帳・大正十二年一月十五日記

未紹介。相馬正一「編年史・太宰治・作家以前」（『国文学』第十五卷第一号「特集文学・無頼の季節」昭和四十五年一月二十日）に題名だけが、山内祥史「太宰治の小学校時代作文（その2）」（『解釈』第十六卷第二号、昭和四十五年二月一

日)に題名と執筆年月日だけが、紹介された。

〔付記〕全集未収録。

吹雪の朝・予習用読方帳・大正十二年一月十八日記(または、大正十二年二月三日記)

小野正文著『入門太宰治』(津軽書房、昭和四十一年十月二十五日)の「生いたち」の章に、冒頭九行分が写真で紹介された。

山内祥史著『太宰治(近代文学資料4)』(桜楓社、昭和四十五年六月五日)所載「小学校時代の作文―『予習用読方帳』に関する資料・覚書―」に、冒頭九行分が紹介された。

小野正文著『入門太宰治(改版)』(津軽書房、昭和四十六年七月十日)の巻頭に、冒頭九行分が写真で紹介された。

〔付記〕全文未紹介。全集未収録。「吹雪の朝」と題する作文には、「一月十八日記」のものと、「二月三日記」のものとの、二篇がある。小野正文氏によって紹介された「吹雪の朝」が、どちらのものであるのか、現在のところ不明である。

入営兵を送る感じ・予習用読方帳・大正十二年一月十八日記

未紹介。相馬正一「少年・太宰治」(「新潮」第六十巻第四号、昭和三十八年四月一日)にその一節が紹介され、また、

相馬正一「編年史・太宰治・作家以前」(「国文学」第十五巻第一号「特集文学・無頼の季節」昭和四十五年一月二十日)に題名だけが、山内祥史「太宰治の小学校時代作文(その2)」(「解釈」第十六巻第二号、昭和四十五年二月一日)に題名と執筆年月日だけが、紹介された。

〔付記〕全集未収録。

私の学校生活・予習用読方帳・大正十二年一月十九日(?)記

未紹介。() 相馬正一「編年史・太宰治・作家以前」(「国文学」第十五巻第一号「特集文学・無頼の季節」昭和四十五年一

月二十日)に題名だけが、山内祥史「太宰治の小学校時代作文(その2)」(「解釈」第十六卷第二号、昭和四十五年二月一日)に題名と執筆年月日だけが、紹介された。

〔付記〕全集未収録。

牛・予習用読方帳・大正十二年一月二十日(?)記

相馬正一「太宰治における作家的資質の問題」(「東奥日報」昭和三十七年六月二十一日)に、全文が紹介された。

相馬正一「高校時代の太宰治(中)」(「太宰治研究」第三号、昭和三十八年四月十九日)に、全文が紹介された。

相馬正一著『若き日の太宰治』(筑摩書房、昭和四十三年三月九日)所載「高校時代の生活」に、全文が紹介された。

山内祥史著『太宰治(近代文学資料4)』(桜楓社、昭和四十五年六月五日)所載「小学校時代の作文」『予習用読方帳』に
関する資料・覚書」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

雪合戦・予習用読方帳・大正十二年一月二十二日記

相馬正一「少年・太宰治」(「新潮」第六十卷第四号、昭和三十八年四月一日)に、一部分が紹介された。

相馬正一著『太宰治(上)―苦悩の青春―』(弘前市立弘前図書館、昭和四十三年一月一日)の「生い立ち」の章に、全文が紹介され、また、末尾十一行分が写真で紹介された。

『没後二十年太宰治展』(毎日新聞社、昭和四十三年六月十八日)に、全文が写真で紹介された。

毎日新聞社編『写真集太宰治の生涯』(毎日新聞社、昭和四十三年九月二十五日)に、全文が写真で紹介された。

山内祥史著『太宰治(近代文学資料4)』(桜楓社、昭和四十五年六月五日)所載「小学校時代の作文」『予習用読方帳』に
関する資料・覚書」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

別れた友に送る・予習用読方帳・大正十二年一月二十五日記

未紹介。相馬正一「編年史・太宰治・作家以前」(「国文学」第十五卷第一号「特集文学・無頼の季節」昭和四十五年一月二十日)に題名だけが、山内祥史「太宰治の小学校時代作文(その2)」(「解釈」第十六卷第二号、昭和四十五年二月一日)に題名と執筆年月日とだけが、紹介された。

〔付記〕全集未収録。

入学試験に合格せるを報ずる手紙・予習用読方帳・大正十二年一月下旬記

相馬正一「太宰治とその時代(父の死)」(「陸奥新報」第八二四五号、昭和四十五年六月十一日)に、冒頭十行分が写真で紹介された。

〔付記〕全文未紹介。全集未収録。

病気見舞の手紙・予習用読方帳・大正十二年一月下旬記

未紹介。相馬正一「編年史・太宰治・作家以前」(「国文学」第十五卷第一号「特集文学・無頼の季節」昭和四十五年一月二十日)に題名だけが、山内祥史「太宰治の小学校時代作文(その2)」(「解釈」第十六卷第二号、昭和四十五年二月一日)に題名と執筆年月日とだけが、紹介された。

〔付記〕全集未収録。

近況を報ずる手紙・予習用読方帳・大正十二年二月二日(?)記

未紹介。相馬正一「編年史・太宰治・作家以前」(「国文学」第十五卷第一号「特集文学・無頼の季節」昭和四十五年一月二十日)に題名だけが、山内祥史「太宰治の小学校時代作文(その2)」(「解釈」第十六卷第二号、昭和四十五年二月一日)に題名と執筆年月日とだけが、紹介された。

〔付記〕全集未収録。

希望・予習用読方帳・大正十二年二月二日（？）記

「文芸」昭和二十八年十二月号（第十卷第十二号）「太宰治文学碑建立記念／太宰治特集号」昭和二十八年十二月一日）の「太宰治作品集」欄に、「綴方」として、全文が紹介された。

山内祥史「太宰治全集未収録資料（Ⅰ）」（「太宰研究」第十八号、昭和四十四年二月二十八日）に、全文が紹介された。
山内祥史「太宰治の小学校時代作文（その2）」（「解釈」第十六卷第二号、昭和四十五年二月一日）に、全文が紹介された。

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「小学校時代の作文―『予習用読方帳』に関する資料・覚書―」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

吹雪の朝・予習用読方帳・大正十二年二月三日記

前記「吹雪の朝」の項を、参照のこと。

〔付記〕全集未収録。

僕の家・予習用読方帳・大正十二年二月三日記

未紹介。相馬正一「編年史・太宰治・作家以前」（「国文学」第十五卷第一号）「特集文学・無頼の季節」昭和四十五年一月二十日）に題名だけが、山内祥史「太宰治の小学校時代作文（その2）」（「解釈」第十六卷第二号、昭和四十五年二月一日）に題名と執筆年月日とだけが、紹介された。

〔付記〕全集未収録。

僕の幼時・予習用読方帳・大正十二年二月四日記

「八雲」昭和二十三年十一月・二月号（第三卷第十一号）「太宰治未発表作品特集」昭和二十三年十一月一日）に、「小品」とし

て、全文が紹介された。

「文芸」昭和二十八年十二月号（第十卷第十二号「太宰治文学碑建立記念／太宰治特集号」昭和二十八年十二月一日）の「太宰治作品集」欄に、「綴方」として、全文が紹介された。

相馬正一「太宰治と『家』の問題Ⅱ―性格形成の背景について―」（「郷土作家研究」第四号、昭和三十九年六月十五日）に、全文が紹介された。

相馬正一「若き日の太宰治の肖像Ⅳ―生い立ち（その三）―」（「北」第一巻第四号、昭和四十二年七月十五日）に、全文が紹介された。

相馬正一著『太宰治（上）―苦悩の青春―』（弘前市立弘前図書館、昭和四十三年一月一日）に、全文が紹介された。

相馬正一著『若き日の太宰治』（筑摩書房、昭和四十三年三月九日）所載「性格形成の背景」に、全文が紹介された。

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「小学校時代の作文―『予習用読方帳』に關する資料・覚書―」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

僕ノ友達・予習用読方帳・大正十二年二月五日記

相馬正一「太宰治について」（「弘前高校自治会誌」八十周年記念号、昭和三十八年十二月）に、全文が紹介された。

山内祥史「太宰治全集未収録資料（Ⅱ）」（「太宰研究」第十八号、昭和四十四年二月二十八日）に、全文が紹介された。

山内祥史「太宰治の小学校時代作文（その2）」（「解釈」第十六巻第二号、昭和四十五年二月一日）に、全文が紹介された。

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「小学校時代の作文―『予習用読方帳』に關する資料・覚書―」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

僕ノ町・予習用読方帳・大正十二年二月六日記

相馬正一「太宰治と金木町―青森県文学散歩(5)―」(「教育広報」第十二卷第六号、昭和三十七年九月二十日)に、全文が紹介された。

山内祥史「太宰治全集未収録資料(Ⅱ)」(「太宰研究」第十八号、昭和四十四年二月二十八日)に、全文が紹介された。
山内祥史「太宰治の小学校時代作文(その2)」(「解釈」第十六卷第二号、昭和四十五年二月一日)に、全文が紹介された。

山内祥史著『太宰治(近代文学資料4)』(桜楓社、昭和四十五年六月五日)所載「小学校時代の作文―『予習用読方帳』に関する資料・覚書―」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

僕の学校・予習用読方帳・大正十二年二月七日記

未紹介。相馬正一「編年史・太宰治・作家以前」(「国文学」第十五卷第一号「特集文学・無頼の季節」昭和四十五年一月二十日)に題名だけが、山内祥史「太宰治の小学校時代作文(その2)」(「解釈」第十六卷第二号、昭和四十五年二月一日)に題名と執筆年月日だけが、紹介された。

〔付記〕全集未収録。

私の家庭・予習用読方帳・大正十二年二月記

未紹介。相馬正一「少年・太宰治」(「新潮」第六十卷第四号、昭和三十八年四月一日)に題名だけが、相馬正一「編年史・太宰治・作家以前」(「国文学」第十五卷第一号「特集文学・無頼の季節」昭和四十五年一月二十日)に題名と執筆年月日だけが、紹介された。

〔付記〕全集未収録。

胃の失敗・予習読方帳・大正十二年一～二月記

未紹介。相馬正一「少年・太宰治」（『新潮』第六十巻第四号、昭和三十八年四月一日）に題名だけが、相馬正一「編年史・太宰治・作家以前」（『国文学』第十五巻第一号「特集文学・無頼の季節」昭和四十五年一月二十日）に題名と執筆年月だけが、紹介された。

〔付記〕全集未収録。津島美知子夫人によれば、「『胃の失敗』は綴り方ではなく教科書の写しか、口語訳のように思われます。」（昭和四十三年九月六日筆者宛）とのことである。

最後の太閤・校友会誌・第三十四号・大正十四年三月二十四日発行・62～64頁・「文壇（二）」欄・署名「二年 津島修治」

「月刊東奥」昭和二十三年八月号（第十巻第五号「追悼太宰治——太宰治追悼——」昭和二十三年八月一日）に、全文が紹介された。

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔付記〕「校友会誌」第三十四号の目次では、「辻魔首氏」の署名となっている。

戯曲虚勢・星座・創刊号・大正十四年夏発行

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔付記〕未確認。『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）所載の「虚勢」文末には、（大正十四年七月二十六日執筆「星座」所載）とあり、同書所載「年譜」の「大正十四年」の項には、「夏、阿部合成など四、五人の級友と同人雑誌『星座』を出し、戯曲『虚勢』を発表。」とあり、さらに、同書所載「後記」の「初期作品」の項には、「『戯曲虚勢』の掲載された『星座』は、中学の級友阿部合成氏等四五人と共に大正十四年夏に出され

た同人雑誌である。」とある。相馬正一氏によれば、「星座」誌は「戯曲虚勢」の所載誌「一号きりで終った」（昭和四十四年三月十八日筆者宛）とのことである。

角力・校友会誌・第三十五号・大正十四年十月二十日発行・19頁・「想華」欄・署名「三年 辻魔首氏」

「八雲」昭和二十三年十一月・二月号（第三卷第十一号）「太宰治未発表作品特集」昭和二十三年十一月一日に、「小品」として、全文が紹介された。

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

温泉・蜃気楼・十月号、創刊号・大正十四年十一月六日発行・5頁・署名「津島修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔付記〕「蜃気楼」創刊号所載の文末には、「大正十二年十月十五日」とある。「蜃気楼」については、「蜃気楼について」（「太宰治全集附録第六号」八雲書店、昭和二十四年二月）、相馬正一著『太宰治（上）——苦悩の青春——』（弘前市立弘前図書館、昭和四十三年一月一日）の「井伏鱒二との出会い」の章、小野正文「津島修治編集同人雑誌『蜃気楼』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）、山内祥史「太宰治年譜考」（同書）の「『蜃気楼』について」の項、山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「中学時代の逸文——同人雑誌『蜃気楼』を中心として」、相馬正一「太宰治とその時代(Ⅱ)——文学への目覚め——」（『陸奥新報』第八二五二号、昭和四十五年六月十八日）、相馬正一「太宰治とその時代(Ⅱ)——作家志望の夢——」（『陸奥新報』第八二五九号、昭和四十五年六月二十五日）、山内祥史「蜃気楼」（『太宰治辞典』清水弘文堂、昭和四十七年六月二十日）等を、参照のこと。

犠牲・蜃気楼・十月号、創刊号・大正十四年十一月六日発行・8頁・署名「津島修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕あとの「地図」の項を参照のこと。

〔付記〕「蜃気楼」創刊号所載の「犠牲」文末には、「（思ひ出）」とある。

編輯後記・蜃気楼・十月号、創刊号・大正十四年十一月六日発行・12頁・署名「津島修治」

小野正文「津島修治編集『蜃気楼』細目」（『郷土作家研究』第四号、昭和三十九年六月十五日）に、全文が紹介された。

山内祥史「太宰治全集未収録資料（Ⅲ）」（『太宰研究』第十九号、昭和四十四年四月三十日）に、全文が紹介された。

小野正文「津島修治編集同人雑誌『蜃気楼』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

地図・蜃気楼・十一月合併号・大正十四年十二月一日発行・9～15頁・「創作」欄・署名「津島修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕「合評記」（『蜃気楼』一月号、大正十五年一月二十三日）には、つぎのように記されている。

金沢「津島君の「犠牲」「地図」の評をして呉れ給へ」／雅美「津島君は我が蜃気楼の編輯者だけあって、実に上手で感心の他はない。殊に「地図」などは立派なものだ。そしてよくあの様な文章が、その小さな頭の中にふくんで居るものと感心して居る、今後ますます奮闘して大いに大いに努力して貰ひたい」／礼治「桜田君のとほりホントに努力して貰ひたい。」／工藤「書き方がうまい。此の調子で発展してもらいたいネ。文章に心を取られて全く至誠の人となるよ。」／金沢「自分の最も好むところに進んで行く……それが一番いいのだ。津島君のは文そのものは批評しない。批評すると云ったところで勿論何も出ない。僕の力が其処まで達してないからだ。読んでいても何も引つかかる物はなく心持よく読める。それと同時に自分の怠惰を攻めねばならないような気がする。コツコツ努めて居るんだ。自分もやらねばならない。」／義広「ホトホト感心した。批評なんてもつてのほかだ」／中村「地

図を読んだ時は非常に心持よく感じた。このやうな創作や金沢君の小説などが僕等の雑誌中にある事は、非常に愉快で且心強いように感じる」／修治『皆がはめて呉れる、悪い気はしない。併しホントに自分のことを思つて呉れるなら大いに欠点も挙げて呉れるべきだと思ふ。自分はずっと進歩したいと思つて居るのだ。』

右の合評会での発言者は、「金沢」『金沢成造、「雅美」『桜田雅美、「礼治」』太宰治の弟津島礼治、「工藤」『工藤竹三郎、「義広」』越浪義博、「中村」』中村貞次郎、「修治」』津島修治のちの太宰治である。なおこの合評会は、大正十四年十二月二十一日に、行なわれたものと推測される。

〔付記〕「蜃気楼」十一月合併号所載の文末には、「大正一四年十一月一七日」とある。

編輯後記・蜃気楼・十一月合併号・大正十四年十二月一日発行・23頁・署名「（修治）」

小野正文「津島修治編集『蜃気楼』細目」（『郷土作家研究』第四号、昭和三十九年六月十五日）に、全文が紹介された。

山内祥史「太宰治全集未収録資料（Ⅲ）」（『太宰研究』第十九号、昭和四十四年四月三十日）に、全文が紹介された。

小野正文「津島修治編集同人雑誌『蜃気楼』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

新文芸日記 大正十五年一月一日～一月三十日記

相馬正一「（未発表資料紹介）太宰治の中学時代の日記」（『太宰治碑建立記念』昭和四十年五月三日）に、「日記の扉」

と「一月一日（金曜）」の部分とが、写真で紹介され、「一月七日」「一月十七日」「一月二十六日」の三日分が、註記・解説つきで紹介された。

『日本文学全集26 太宰治集』（河出書房新社、昭和四十二年二月三日）に、「付録」として、「太宰治日記」と題し全文が紹介された。

相馬正一「△資料紹介▽太宰治・中学時代の日記」（「北」第三号「太宰治特集」昭和四十二年六月十五日）に、「一月一日（金）」から「一月十一日（月）」までの十一日分が、註記・解説つきで紹介された。

『没後二十年太宰治展』（毎日新聞社、昭和四十三年六月十八日）に、「新文芸日記」の表紙と「一月一日（金曜）」の部分とが、写真で紹介された。

毎日新聞社編『写真集太宰治の生涯』（毎日新聞社、昭和四十三年九月二十五日）に、「一月一日（金曜）」の部分が、写真で紹介された。

「太宰のアルバム―三十九年間―」（「太陽」第九九号、「特集・太宰治と津軽」昭和四十六年八月十二日）に、「一月一日（金曜）」の部分が、写真で紹介された。

〔付記〕全集未収録。「新文芸日記」については、相馬正一「△未発表資料紹介▽太宰治の中学時代の日記」（「太宰治碑建立記念」昭和四十年五月三日）、『日本文学全集26太宰治集』（河出書房新社、昭和四十二年二月三日）所載「付録／太宰治日記」の、編集部のまえがき、「豪華版日本文学全集しおり②」（河出書房新社、昭和四十二年二月三日）の「編集室だより」、相馬正一「△資料紹介▽太宰治・中学時代の日記」（「北」第三号「太宰治特集」昭和四十二年六月十五日）等を、参照のこと。

巻頭言・蜃気楼・一月号・大正十五年一月二十三日発行・1頁・署名「首氏」

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「中学時代の逸文―同人雑誌『蜃気楼』を中心として―」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。「蜃気楼」一月号の「目次」には、「巻頭言……同人」とある。太宰治単独の執筆になるものではなく、他の同人と共に書いたものである。

負けざらひト敗北ト・蜃気楼・一月号・大正十五年一月二十三日発行・13～21頁・「創作」欄・署名「津島修治」

『太宰治全集第十二卷』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

『同時代評』『合評記』（『蜚氣楼』四月号、大正十五年四月二十三日）には、つぎのように記されている。

金沢『負けざらひト敗北ト、侏儒樂、私のシゴトの三つ——（津島修治君）』『雅美』『さすがは津島君は上手だ。この調子で励めたら末恐しいものと思はれる』／礼治『感更になし』／平山『桜田君に同感、併し自分は津島君の漫心を恐る。どうか十分心を引締めて、将来世に名をなす一流の文士となって貰ひたい』／修治『ありがとう』／中村『私のシゴトの外は大低の人と同感ですが『私のシゴト』は面白く感じた。人生の面白い部分をテーマにとって、人生の矛盾を言つて居る。実に面白く感じた』／樫村『何と言つても親分だけあつて修治兄はうまいて……實際うまいね、ほんとにうまいね、何と言つてもうまいね、修治さんはうまいわ、あら……うまいうまいてばかり言つて……ごめんなさいね……』／修治『変な上げかたは、よせやい』／金沢『負けざらひト敗北ト』は四題になつてゐるが成程どれが一番いいか分らない筈だと、自分も思つた。自分も一番いいのを探して見た。だが矢張り見つかさうもなかった。同じテーマを以て書き表はした筆の力——四つとも面白く感じた——『侏儒樂』の中にある（ホントに善良な人ばかり居る世界に行きたい……退屈ぢやないかネ）の一つで君の人物がよく表はれてゐると思ふ。君の發展は此処から始まるのではなからうか』

右の合評会での発言者は、「金沢」——金沢成造、「雅美」——桜田雅美、「礼治」——津島礼治、「平山」——平山四十三、「修治」——津島修治、「中村」——中村貞次郎、「樫村」——樫村実である。なおこの合評会は、大正十五年三月十八日に、行なわれたものと推測される。

『付記』『蜚氣楼』一月号では、「(一)子守唄」13～14頁、「(二)入選」14～15頁、「(三)ワルソーの市長」15～16頁、「(四)日記帳」16～20頁と、所載されている。なお、文末には、「(十四、十一、十二)」とあり、さらに、「(後記)」として、「同じ『テーマ』を色々和形を変へて表現して行くのもあながち興味の無いことでもなからう。

／以上四種の創作の内で、どれが一番いいか、自分にはわからない。皆同じ位の自信があるものばかりだから。」と記されている。

合評記・蜃気楼・一月号・大正十五年一月二十三日発行・26頁・署名「修治」

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「中学時代の逸文―同人雑誌『蜃気楼』を中心として―」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。「蜃気楼」一月号では、「合評記」の題の直後に、「一四―一二―二一」とあり、さらに文末には、「（これで合評会が終る。／風の強い、雨の降る、電気の暗いヒヤヒヤした晩であった。）」とある。他の同人と共に語ったものである。

編輯後記・蜃気楼・一月号・大正十五年一月二十三日発行・31頁・署名「（修治）」

小野正文「津島修治編集『蜃気楼』細目」（「郷土作家研究」第四号、昭和三十九年六月十五日）に、全文が紹介された。

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

巻頭言・蜃気楼・二月号・大正十五年二月八日発行・1頁・署名「首氏」

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「中学時代の逸文―同人雑誌『蜃気楼』を中心として―」に、全文が紹介された。

〔同時代評〕「合評記」（「蜃気楼」四月号、大正十五年四月二十三日）には、つぎのように記されている。

平山『一月号の巻頭言は大低合点が行くが、二月号の首氏の言は何を言ってるのか俺にはさっぱりわからない、津島君の答弁を求む』／修治「残念なことだが、わからなければそれまでのことだ。別に説明しない。考へて

呉れ、……〔略〕

右の合評会での発言者は、「平山」＝平山四十三、「修治」＝津島修治である。なおこの合評会は、大正十五年三月十八日に、行なわれたものと推測される。

〔付記〕全集未収録。「蜃気楼」二月号の「目次」には、「巻頭言……同人」とある。太宰治単独の執筆になるものではなく、他の同人と共に書いたものである。

侏儒楽・蜃気楼・二月号・大正十五年二月八日発行・4～5頁・署名「辻魔首氏」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕「負けざらひト敗北ト」の項を、参照のこと。

〔付記〕「蜃気楼」二月号所載の文末には、「一五、一、一九」とある。

私のシゴト・蜃気楼・二月号・大正十五年二月八日発行・7～10頁・署名「津島修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕「負けざらひト敗北ト」の項を、参照のこと。

〔付記〕「蜃気楼」二月号所載の文末には、「一五、一、一九」とある。

蜃気楼大講演会・蜃気楼・二月号・大正十五年二月八日発行。10～12頁・署名「首氏君」

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「中学時代の逸文―同人雑誌『蜃気楼』を中心として―」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。太宰治単独の執筆になるものではなく、他の同人と共に書いたものである。

編輯後記・蜃気楼・二月号・大正十五年二月八日発行・25～26頁・署名「（修治）」

小野正文「津島修治編集『蜃気楼』細目」（『郷土作家研究』第四号、昭和三十九年六月十五日）に、全文が紹介された。

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

地図・校友会誌・第三十六号・大正十五年二月十日発行・101～107頁・「芽ばえ」欄・署名「三乙 津島修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕「蜃気楼」発表の「地図」の項を、参照のこと。

〔付記〕「校友会誌」第三十六号所載の文末には、「大正十四年十一月十七日」とある。本文は、「蜃気楼」十一月合併号に所載の「地図」と、まったく同じである。「校友会誌」については、山内祥史「太宰治年譜考」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）の「『地図』の発表誌について」の項を、参照のこと。

巻頭言・蜃気楼・四月号・大正十五年四月二十三日発行・1頁・署名「衆二」

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「中学時代の逸文―同人雑誌『蜃気楼』を中心として―」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。この四月号の誌名、表紙では「しんきろう」となっている。太宰治単独の執筆になるものではなく、他の同人と共に書いたものである。

侏儒楽・蜃気楼・四月号・大正十五年四月二十三日発行・6～8頁・署名「X・Y・Z」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕茄子生「ちよっと」（『蜃気楼』五月号、大正十五年五月二十一日）には、つぎのように記されている。

『侏儒楽』……。これはたしかに作者の気分を表はしてゐます。『一寸待て』『酔ふ勿れ』『そは真に汝の敵か』『なんだ小さな事ではないか』『汝の前途は光ってるぞ』『ケツサク！ 俺れは叫びたい。どうだいXYZ氏

よ。此の一語一語をつづけて一つの作文を作ったら、たしかに可能性があると俺れは見た。『兵隊靴が大流行の様だね云々』の一節にはたしかに共鳴した。

『付記』『蜃気楼』四月号所載の文末には、「四、十三」とある。

針医の圭樹・蜃気楼・四月号・大正十五年四月二十三日・8頁・「創作」欄・署名「辻島衆二」

『太宰治全集第十二卷』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

『同時代評』茄子生「ちよっと」（『蜃気楼』五月号、大正十五年五月二十一日）には、つぎのように記されている。

『針医の圭樹』……。此れに対しては、俺は批評の言葉を持たない。圭樹の極端な利己主義。彼は利己のため死んだ。而してどこまでも寛大な多右衛門がその利己主義の圭樹の体で被はれた。そして利己主義を利己とみないで命を投げ出して主人を助けた人。見上げたものと見る。世人は案外わからぬものさ。

また、「合評記」（『蜃気楼』九月号、大正十五年九月二十五日）の「針医の圭樹、瘤、將軍 津島修治」の項には、つぎのように記されている。

桜田『感更になし』／平山『みんな下手だ。あきれるネ。マア針医の圭樹がいいと言へば言はれる位のものだ』／修治『アドバイス有難う。僕の慢心を、いさめて呉れるのはホントに君ばかりだ』／中村『修治えびったナ』／修治『えばるんぢゃない。下手は下手だが呆れる程下手だとは誰だつて思はんぢゃないか』／渡辺『読んであるうちに神経がトンガつて来るやうだ。もう少しアッサリ水を流したやうに行かないものか』／中村『將軍が気に入ったといふのは將軍もシャルといふ事を知つてやっぱり人間だナと言ふ所は面白い。他の編は読んであきる所が多い』／金沢『針医の圭樹について言ふが、あの作で君の苦心を認めたい。最後に於て圭樹と多左衛門を火焰の中に入れて殺した所が気に入ただけでは止まない。君の苦心らしいものを思つてみたい。瘤も軽くていいサ。兄と弟が面白く表はれてゐるネ。將軍の最後にある（フン……僕はさも得意そうに鼻を動かした）を読んだ自分も（

成程ナ……フフン……とうなづかれる……』

右の合評会での発言者は、「桜田」―桜田雅美、「平山」―平山四十三、「修治」―津島修治、「中村」―中村貞次郎、「渡辺」―渡辺庸助、「金沢」―金沢成造である。

〔付記〕「蜃気楼」四月号の文末には、「一五、三、三十一」とある。

合評記・蜃気楼・四月号。大正十五年四月二十三日発行・22～28頁・署名「修治」

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「中学時代の逸文―同人雑誌『蜃気楼』を中心として―」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。「蜃気楼」一月号では、「合評記」の題の直後に、「（15・3・18）」とあり、さらに「出席者」として、「金沢、平山、中村、桜田、修治、樫村、礼治」の名が記されている。他の同人と共に語ったものである。

編輯後記・蜃気楼・四月号。大正十五年四月二十三日発行・28～29頁・署名「（衆二）」

小野正文「津島修治編集『蜃気楼』細目」（『郷土作家研究』第四号、昭和三十九年六月十五日）に、全文が紹介された。

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

侏儒楽・蜃気楼・五月号。大正十五年五月二十一日発行・9～11頁・「創作」欄・署名「X・Y・Z」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔付記〕五月号の誌名、表紙では「しんきろう」と印刷されている。

瘤・蜃気楼・五月号。大正十五年五月二十一日発行・13～16頁・「創作」欄・署名「辻島衆二」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕「針医の桂樹」の、「合評記」の項を参照のこと。

〔付記〕「蜷気楼」五月号所載の文末には、「一五、五、五」とある。

編輯後記・蜷気楼・五月号・大正十五年五月二十一日発行・23頁・署名「衆二」

小野正文「津島修治編集
同人雑誌

『蜷気楼』細目」（「郷土作家研究」第四号、昭和三十九年六月十五日）に、全文が紹介された。

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜷気楼』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

傀儡・蜷気楼・六月号・大正十五年六月五日発行・8～10頁・署名「X・Y・Z」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕「合評記」（「蜷気楼」九月号、大正十五年九月二十五日）の「侏儒楽、傀儡X・Y・Z」の項には、つぎのように記されている。

金沢『傀儡の（だってあの時オレがタクアンヅケを食って行っただから口の中が臭くって……）には全く参った。なんてキタナイ書きぶりだらう。気分が悪いときなんかは腹の中のモノを吐き出してしまふヨ……全くオレは少して吐かん……とした……』／平山『（一寸まで）なんて全くX・Y・Zとは思はなかった。いふことはあるが。言えない』

右の合評会での発言者は、「金沢」＝金沢成造、「平山」＝平山四十三である。

〔付記〕「蜷気楼」六月号に所載の文末には、「（五月二十一日）」とある。なお、この六月号の誌名、表紙では「シンキロウ」となっている。

將軍・蜷氣楼・六月号・大正十五年六月五日発行・11～14頁・署名「津島修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕「針医の圭樹」の「合評記」の項を、参照のこと。

〔付記〕「蜷氣楼」六月号に所載の文末には、「十四、五、二十一」とある。

蜷氣楼同人諸価値表・蜷氣楼・六月号・大正十五年六月五日発行・21頁・署名なし

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜷氣楼』細目」（『郷土作家研究』第四号、昭和三十九年六月十五日）に、表全体が写真で紹介された。

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜷氣楼』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）に、表全体が写真で紹介された。

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「中学時代の逸文―同人雑誌『蜷氣楼』を中心として―」に、表全体が紹介された。

〔付記〕全集未収録。中村貞次郎の「ひとりゆくもの」（『太宰治の肖像』楡書房、昭和二十八年十一月五日）「中学時代の太宰治」（『太宰治全集第十二巻月報12』筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）、「太宰治の少年時代」（『国文学』第八巻第五号「特集太宰治における人間と風土」昭和三十八年四月一日）、「中学時代の太宰治」（『写真集太宰治の生涯』毎日新聞社、昭和四十三年九月二十五日）等の諸文章、および、「蜷氣楼」全冊所蔵者葛原四津男の、「蜷氣楼同人諸価値表は修治君が書いたものです。」との言等から、太宰治の執筆と推定される。

編輯後記・蜷氣楼・六月号・大正十五年六月五日発行・23～24頁・署名「（修治）」

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜷氣楼』細目」（『郷土作家研究』第四号、昭和三十九年六月十五日）に、全文が紹介された。

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜷氣楼』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）

に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

哄笑に至る・蜃気楼・七月号・大正十五年（月日不明）発行・7～12頁・署名「津島修治」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔付記〕「蜃気楼」七月号に所載の文末には、「（大正十五年七月）」とあり、さらにそのあとに、「東京に居る兄の利一からこんな手紙が来た。／『こんど同人雑誌十字街に俺が創作△苦笑に終る▽を書いてやったが、近頃の俺の自信がある作品といつてよい。読んで見ろ』／自分はまた『苦笑に終る』を読んで見ない。／そして自分も『哄笑に終る』を書いて見た。」とある。なお、この七月号の誌名、表紙では「The SHINKIRO」となっている。また、この号は、現物所有者葛原四津男のものも、「奥付欠損のため印刷、発行日不明」である。

因果帳・蜃気楼・七月号・大正十五年（月日不明）発行・19頁・署名なし

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」（「郷土作家研究」第四号、昭和三十九年六月十五日）に、表全体が写真で紹介された。
同人雑誌『蜃気楼』細目

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）に、表全体が写真で紹介された。

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「中学時代の逸文——同人雑誌『蜃気楼』を中心として——」に、表全体が紹介された。

〔付記〕全集未収録。「蜃気楼同人諸価値表」の「付記」の項に紹介した、中村貞次郎の諸文章、および、「蜃気楼」原誌の「目次」に葛原四津男が記した、「因果帳……津島修治」（傍点筆者）の記録等から、太宰治の執筆と推定される。

編輯後記・蜃気楼・七月号・大正十五年（月日不明）発行・20頁・署名「（修治）」

小野正文「津島修治編集『蜃気楼』細目」（『郷土作家研究』第四号、昭和三十九年六月十五日）に、全文が紹介された。

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

口紅・青んぼ・創刊号・大正十五年九月一日発行・4～9頁・署名「辻島衆二」

相馬正一「太宰治中学時代の同人雑誌『青んぼ』を紙上紹介」（『陸奥新報』第五二三三号、昭和三十七年二月四日）に「太宰の小品を読んで」と題する解説を付して、全文が紹介された。

相馬正一「太宰治全集未収録資料／同人雑誌『青んぼ』細目／『弘高新聞』掲載作品」（『郷土作家研究』第三号、昭和三十七年七月十五日）に、全文が紹介され、また、一部が写真で紹介された。

『定本太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十八年二月五日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕「青んぼ街」（『青んぼ』第一巻第二号、大正十五年十月五日）所載の楨島真三「辻島君の『口紅』」には、つぎのように記されている。

自重して欲しい。筆と頭が走り過ぎるような感じがする。うは滑べりだ。深さが無い。足に力を入れて一歩、一歩たしかにふんで歩いて呉れ。

〔付記〕「青んぼ」創刊号に所載の文末には、「一十五年八月」とある。「青んぼ」については、相馬正一「太宰治中学時代の同人雑誌『青んぼ』を紙上紹介」（『陸奥新報』第五二三三号、昭和三十七年二月四日）、相馬正一「同人雑誌『青んぼ』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）、山内祥史「太宰治年譜考」（同上）の「『青んぼ』について」の項、相馬正一「太宰治とその時代」（3）雑誌『青んぼ』一」（『陸奥新報』第八二

六六号、昭和四十五年七月二日）、相馬正一著『太宰治と井伏鱒二』（津輕書房、昭和四十七年二月二十日）所載「資料」「青んぼ」と『弘高新聞』の項、山内祥史「青んぼ」（『太宰治辞典』清水弘文堂、昭和四十七年六月二十日）等を、参照のこと。

埋め合せ・青んぼ・創刊号・大正十五年九月一日発行・22～23頁・「随筆」欄・署名「津島修治」

相馬正一「太宰治中学時代の同人雑誌『青んぼ』を紙上紹介」（『陸奥新報』第五二三三号、昭和三十七年二月四日）に、

「太宰の小品を読んで」と題する解説を付して、全文が紹介された。

相馬正一「太宰治全集未収録資料／同人雑誌『青んぼ』細目／『弘高新聞』掲載作品」（『郷土作家研究』第三号、昭和三十

七年七月十五日）に、全文が紹介された。

『定本太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十八年二月五日）に、全文が収載された。

青んぼ街・青んぼ・創刊号・大正十五年九月一日発行・24頁・署名「（衆）」「（辻島）」「（衆二）」

相馬正一「太宰治全集未収録資料／同人雑誌『青んぼ』細目／『弘高新聞』掲載作品」（『郷土作家研究』第三号、昭和三十

七年七月十五日）に、全文が紹介された。

相馬正一「同人雑誌『青んぼ』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）に、全文が紹介された。

相馬正一著『太宰治と井伏鱒二』（津輕書房、昭和四十七年二月二十日）所載「資料『青んぼ』と『弘高新聞』」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。太宰治単独の執筆になるものではなく、他の同人と共に書いたものである。

雑誌・蜃気楼・九月号・大正十五年九月二十五日発行・7～12頁・「随筆」欄・署名「津島修治」

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「中学時代の逸文―同人雑誌『蜃気楼』を

中心として」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。この九月号の誌名、表紙では「THE SHINKIRO」となっている。

合評記・蜃気楼・九月号・大正十五年九月二十五日発行・22～26頁・署名「修治」

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「中学時代の逸文―同人雑誌『蜃気楼』を中心として―」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。「蜃気楼」九月号では、「合評記」の題の直後に、「出席者」として「修治、中貞、桜田、渡辺、葛西、葛原、樫村、平山、金沢」の名が記されている。他の同人と共に語ったものである。

編輯後記・蜃気楼・九月号・大正十五年九月二十五日・26～27頁・署名「（修治）」

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」（「郷土作家研究」第四号、昭和三十九年六月十五日）に、全文が紹介された。

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」（『太宰治（日本文学研究資料叢書）』有精堂、昭和四十五年三月二十日）に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

再び埋め合せ・青んぼ・第一巻第二号・大正十五年十月五日発行・18～22頁・署名「辻島衆二」

相馬正一「太宰治全集未収録資料／同人雑誌『青んぼ』細目／『弘高新聞』掲載作品」（「郷土作家研究」第三号、昭和三十七年七月十五日）に、全文が紹介された。

『定本太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十八年二月五日）に、全文が収載された。

青んぼ街・青んぼ・第一巻第二号・大正十五年十月五日発行・24～25頁・署名「（辻島）」

相馬正一「太宰治全集未収録資料／同人雑誌『青んぼ』細目／『弘高新聞』掲載作品」（「郷土作家研究」第三号、昭和三十七年七月十五日）に、全文が紹介された。

相馬正一「同人雑誌『青んぼ』細目」(『太宰治(日本文学研究資料叢書)』有精堂、昭和四十五年三月二十日)に、全文が紹介された。

相馬正一著『太宰治と井伏鱒二』(津軽書房、昭和四十七年二月二十日)に、所載「資料『青んぼ』と『弘高新聞』」に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。太宰治単独の執筆になるものではなく、他の同人と共に書いたものである。

モナコ小景・蜃気楼・十月号・大正十五年十一月八日発行・3～9頁・「創作」欄・署名「津島修治」
『太宰治全集第十二巻』(筑摩書房、昭和三十一年九月二十日)に、全文が収載された。

〔付記〕『蜃気楼』十月号に所載の文末には、「(十五―九―二十六)」とあり、さらにそのあとに、「『口紅』第二編としてこの稿を書く。『口紅』第一編は『青んぼ』創刊号所載。合せて乞一読。」とある。なお、この十月号の誌名、表紙では「THE SHINKIRO」となっている。

編輯後記・蜃気楼・十月号・大正十五年十一月八日発行・37～38頁・署名「(修治)」

小野正文「津島修治編集同人雑誌『蜃気楼』細目」(『郷土作家研究』第四号、昭和三十九年六月十五日)に、全文が紹介された。

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」(『太宰治(日本文学研究資料叢書)』有精堂、昭和四十五年三月二十日)に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

怪談・蜃気楼・十一月合併号・大正十五年十二月二十日発行・23～30頁・「しんきろう特別作品」欄・署名「津島修治」
『太宰治全集第十二巻』(筑摩書房、昭和三十一年九月二日)に、全文が収載された。

〔付記〕『蜃気楼』十一月合併号に所載の文末には、「(以下次回)」とある。なお、この十二月合併号の誌名、表紙では「THE SHI NKIRO」となっている。

編輯後記・蜃気楼・十二月合併号・大正十五年十二月二十日発行・30頁・署名「(修治)」

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」(『郷土作家研究』第四号、昭和三十九年六月十五日)に、全文が紹介された。

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」(『太宰治(日本文学研究資料叢書)』有精堂、昭和四十五年三月二十日)に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

(掌劇) 名君・蜃気楼・一月号・昭和二年二月十五日発行・19頁・「創作」欄・署名「津嶋修治」

『太宰治全集第十二卷』(筑摩書房、昭和三十一年九月二十日)に、全文が収載された。

〔付記〕「蜃気楼」一月号の「目次」には、「名君(戯曲)……津島修治」とある。

編輯後記・蜃気楼・一月号・昭和二年二月十五日発行・38頁・署名「(修治)」

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」(『郷土作家研究』第四号、昭和三十九年六月十五日)に、全文が紹介された。

小野正文「津島修治編集 同人雑誌『蜃気楼』細目」(『太宰治(日本文学研究資料叢書)』有精堂、昭和四十五年三月二十日)に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

KIMONO・昭和二年記・署名「L. I. I. Shuge Tushima」

津島修治「津島修治編輯『KIMONO』」(『太宰治研究』第八号、昭和四十二年六月十九日)に、全文が紹介され、石沢深美訳「高校時代英文」に、その写真と石沢深美訳と訳者註とが所載された。

〔付記〕全集未収録。高校時代の英文文については、太宰治「猿面冠者」(『鶴』第二輯、昭和九年七月一日)、津島修治「高校時代英文」(『KIMONO』はみ)、「太宰治研究」第八号、昭和四十二年六月十九日)、相馬正一著『太宰治と井伏鱒二』(津野書房、昭和四十七年二月二十日)所載「『猿面冠者』と英文文」の項などを、参照のこと。

What is Real Happiness?・昭和二年記・署名 [L. I. I. S. Tsushima]

『太宰治 (日本文学アルバム 15) 』 (筑摩書房、昭和三十年十月二十日) に、一部分が写真で紹介された。

『太宰治 (近代作家研究アルバム) 』 (筑摩書房、昭和三十九年六月二十日) に、一部分が写真で紹介された。

津島修治 未発表資料 津島修治 未発表資料 石沢深美 未発表資料 石沢深美 未発表資料 “KIMONO” はか (「太宰治研究」第八号、昭和四十二年六月十九日) に、全文が紹介され、さらに、その写真と石沢深美と訳者註とが所載された。

『没後二十年太宰治展』 (毎日新聞社、昭和四十三年六月十八日) に、一部分が写真で紹介された。

『写真集太宰治の生涯』 (毎日新聞社、昭和四十三年九月二十五日) に、一部分が写真で紹介された。

〔付記〕 全集未収録。

The Real Cause of War・昭和二年記・署名 [L. I. I. S. Tsushima]

津島修治 未発表資料 津島修治 未発表資料 石沢深美 未発表資料 石沢深美 未発表資料 “KIMONO” はか (「太宰治研究」第八号、昭和四十二年六月十九日) に、全文が紹介され、さらに、その写真と石沢深美と訳者註とが所載された。

〔付記〕 全集未収録。

Should the Sale of Alcoholic Beverages be Restricted?・昭和二年記・署名 [L. I. I. S. Tsushima]

津島修治 未発表資料 津島修治 未発表資料 石沢深美 未発表資料 石沢深美 未発表資料 “KIMONO” はか (「太宰治研究」第八号、昭和四十二年六月十九日) に、全文が紹介され、さらに、その写真と石沢深美と訳者註とが所載された。

〔付記〕 全集未収録。

創刊の辞 (仮題)・細胞文芸・創刊号・昭和三年五月一日発行・1頁・署名 [辻島衆二]

『太宰治全集附録第五号』 (八雲書店、昭和二十三年一月三十日) に、全文が写真で紹介された。

『太宰治全集第十二巻』 (筑摩書房、昭和三十一年九月二十日) 所載の「後記」に、全文が引用された。

〔付記〕「細胞文芸」創刊号では、無題で所載されている。また、筆者署名も、「同人／富田弘宗／辻島衆二／三浦充美」の、連記となっている。なお、太宰治が筆者であるかもしれないと推測される文章に、「細胞文芸」創刊号と第一巻第三号とに所載の、「細胞分裂」欄二頁があり、この欄は、第一巻第二号にも所載されたと、推定される。「細胞分裂」欄については、相馬正一著『若き日の太宰治』（筑摩書房、昭和四十三年三月九日）所載「高校時代の生活」を、参照のこと。また、「細胞文芸」については、比賀志英郎「彼」（『細胞文芸』第一巻第三号、昭和三年七月一日）、『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）所載「後記」の「初期作品」の項、三浦正次「太宰治と細胞文芸」（『太宰治全集第十二巻月報12』筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）、相馬正一著『太宰治（上）―苦悩の青春―』（弘前市立弘前図書館、昭和四十三年一月一日）の「コミュニティの旋風」の項、相馬正一著『若き日の太宰治』（筑摩書房、昭和四十三年三月九日）所載「高校時代の生活」、平岡敏男「高校時代の太宰治」（『写真集太宰治の生涯』毎日新聞社、昭和四十三年九月二十五日）、相馬正一「太宰治とその時代①」―「細胞文芸」創刊―」（『陸奥新報』第八三二二号、昭和四十五年八月十六日）、相馬正一「太宰治とその時代②」―生家の告発―」（『陸奥新報』第八三二八号、昭和四十五年八月二十三日）、相馬正一「太宰治とその時代③」―ライバルの出現―」（『陸奥新報』第八三三五号、昭和四十五年八月三十日）、石上玄一郎「異様な感銘―弘前高校時代―」（『太陽』第九九号「特集・太宰治と津軽」昭和四十六年八月十二日）、山内祥史「細胞文芸」（『太宰治辞典』清水弘文堂、昭和四十七年六月二十日）、石上玄一郎著『悪魔の道程』（冬樹社、昭和四十七年七月三十一日）所載「弘高時代の太宰」の項などを、参照のこと。

長篇小説 無間奈落・細胞文芸・創刊号・昭和三年五月一日発行・57頁・署名「辻島衆二」

「八雲」昭和二十三年十一月、二月号（第三巻第十一号）「太宰治未発表作品特集」昭和二十三年十一月一日）に、「序編百七枚から編集の都合で三分の一に割愛した」形で、紹介された。

『地主一代―未発表作品集―』（八雲書店、昭和二十四年四月十五日）に、「序編 父の妾宅」が全文収載された。

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、「序編 父の妾宅」が全文収載された。

〔同時代評〕竹内俊吉「『細胞文芸』その他」（『東奥日報』昭和三年六月十五日）には、つぎのように記されている。

『細胞文芸』は弘高の津島衆治君がやってゐる。第一号なんかは堂々としてゐた。お蔭で大へん売れなかったといふことだ。同人雑誌の五十銭は事実高すぎるけれども、かうした部厚な雑誌が私達のまはりから生れたことは愉快である。／＼一号から津島君は『無限奈落』といふ長篇小説を書いてゐる。作品の出来は声を大きくしてはめなければならぬものではないが、かうした大きい物を書いて行きつつある同君のどっしりした根強さに期待を持つ。中央の知名作家の随筆などもよく集めてゐるが、あれは大して良い編輯方法だとは思はぬ。もっと身の入った小説でも集める工夫の方が良い。一号の八木隆一郎君の小説なんかは、昨今の中央の雑誌にだってあまり見ない程の良いものだとは思つた。望むらくはさうした新しい人の新しい力のある作品を、どんどん発表して貰ひたいことだ。

〔付記〕「細胞文芸」創刊号には、「序編 父の妾宅」のみを収載。同誌所載の文末には、「（序編終り）」とあり、さらに、何字かの空白をおいて、「（三・三・二十一）」とある。

編輯後記・細胞文芸・創刊号・昭和三年五月一日発行・山頁・署名「（辻島）」

未紹介。

〔付記〕全集未収録。

長篇小説 無間奈落^{むげたならく}・細胞文芸・六月号、第一巻第二号・昭和三年六月発行

未紹介。

〔付記〕全集未収録資料。未確認。『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）所載の「後記」には、『無間奈落』はその第一回を五月号に、第二回を六月号に載せ、そのまま中絶となったが、六月号が散佚しているため、その第二回分を収録することができなかった。」と、記されている。「細胞文芸」第一巻第二号は、現在まだ

発見されておらず、見る事ができない。なお、相馬正一「太宰治とその時代Ⅱーライバルの出現ー」（『陸奥新報』第八三二五号、昭和四十五年八月三十日）には、「太宰治のノートに落書きされていた『細胞文芸』2号の図柄」が、写真で紹介されている。

編輯後記・細胞文芸・六月号、第一卷第二号・昭和三年六月発行
未紹介。

〔付記〕全集未収録資料。未確認。

股をくぐる・細胞文芸・七月号、第一卷第三号・昭和三年七月一日発行・50〜62頁・署名「辻島衆二」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔付記〕『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）所載の文末には、「（昭和三年六月十三日執筆
「細胞文芸」昭和三年七月号）」とある。初出の文末は、未確認。

編輯後記・細胞文芸・七月号、第一卷第三号・昭和三年七月一日発行・表紙3頁・署名「（辻島）」
未紹介。

〔付記〕全集未収録。

彼等とこのとき母・細胞文芸・九月創作号、第一卷第四号・昭和三年九月五日発行・23〜32頁・「創作」欄・署名
「辻島衆二」

『地主一代―未発表作品集―』（八雲書店、昭和二十四年四月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔付記〕「細胞文芸」九月創作号所載の文末には、「（三・八・九）」とある。

編輯後記・細胞文芸・九月創作号、第一卷第四号・昭和三年九月五日発行・98頁・署名「（辻嶋）」

太宰治「喝采」(『若草』第十二卷第十号、昭和十一年十月一日)に、全文が紹介された。

〔付記〕「喝采」の収載過程については、「喝采」の項を参照のこと。

此の夫婦・校友会雑誌・第十三号・昭和三年十二月十五日・15頁・署名「津島修治」

『地主一代―未発表作品集―』(八雲書店、昭和二十四年四月十五日)に、全文が収載された。

『太宰治全集第十二卷(筑摩書房、昭和三十一年九月二十日)に、全文が収載された。

〔付記〕「校友会雑誌」第十三号所載の文末には、「昭和三年拾月」とある。「校友会雑誌」については、相馬正一著『若き日の太宰治』(筑摩書房、昭和四十三年三月九日)所載「高校時代の生活」を、参照のこと。

掌^{あはれ}鈴打・弘高新聞・第五号・昭和四年二月十九日発行・第4面・署名「小菅銀吉」

相馬正一「太宰治全集未収録資料」^{同人雑誌}『青んぼ』細目／『弘高新聞』掲載作品」(『郷土作家研究』第三号、昭和三十

七年七月十五日)に、全文が紹介され、また、一部が写真で紹介された。

『定本太宰治全集第十二卷』(筑摩書房、昭和三十八年二月五日)に、全文が収載された。

〔付記〕「弘高新聞」第五号所載の文末には、「(四、二、一)」とある。「弘高新聞」については、相馬正一著『太宰治と井伏鱒二』(津軽書房、昭和四十七年二月二十日)所載「『青んぼ』と『弘高新聞』」を、参照のこと。

哀^{あはれ}蚊・弘高新聞・第六号・昭和四年五月十三日発行・第4面・署名「小菅銀吉」

相馬正一「太宰治全集未収録資料」^{同人雑誌}『青んぼ』細目／『弘高新聞』掲載作品」(『郷土作家研究』第三号、昭和三十

七年七月十五日)に、全文が紹介された。

『定本太宰治全集第十二卷』(筑摩書房、昭和三十八年二月五日)に、全文が収載された。

〔付記〕「弘高新聞」第六号所載の文末には、「(四、四、二十五)」とある。なおこの「弘高新聞」第六号、「(一)」

「(二)」「(三)」面は、「昭和四年五月十三日」の発行となっているが、「(四)」面は、「昭和四年四月十三日」の発行

となっている。

虎徹宵話・獵騎兵・第六号、創作特輯号・昭和四年七月十五日発行、昭和四年八月三日発売・9頁・署名「小菅銀吉」

山内祥史「『虎徹宵話』の初稿―太宰治の左翼思想的傾斜・資料―」（『解釈と鑑賞』第三十四卷第五号「二十世紀旗手・太宰治」昭和四十四年五月一日）に、全文が紹介された。

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載の「『虎徹宵話』の初稿―太宰治の左翼思想的傾斜・資料―」に、全文が紹介された。

『付記』全集未収録。「獵騎兵」第六号の「目次」では、署名が「小菅銀吉」となっている。また、同誌所載の文末には、「（四・三・十）」とある。「獵騎兵」については、藤田金一「桜桃忌に寄せて―津島と小泉―」（『東奥日報』第二二六七一号、昭和三十年六月十八日）、藤田金一「郷愁の青森―その二海の子供等（レ・ザンファン・ド・ラ・メル）―」（『北の街』第七十五号、昭和四十三年十一月一日）、山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「『虎徹宵話』の初稿―太宰治の左翼思想的傾斜・資料―」等を参照のこと。

花火・弘高新聞・第八号・昭和四年九月二十五日発行・第4面・署名「小菅銀吉」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

『付記』「弘高新聞」第八号所載の文末には、「（四、九、十三）」とある。

十月の創作―文芸時評―・弘高新聞・第九号・昭和四年十月二十七日・第4面・署名「大藤熊太」

相馬正一「太宰治全集未収録資料／同人雑誌『青んぼ』細目／『弘高新聞』掲載作品」（『郷土作家研究』第三号、昭和三十七年七月十五日）に、全文が紹介され、また、一部が写真で紹介された。

『定本太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十八年二月五日）に、全文が収載された。

虎徹宵話・弘高校友会雑誌・第十五号・昭和四年十二月十五日・184頁・署名「小菅銀吉」

「八雲」昭和二十三年十一月、二月号（第三卷第十一号）「太宰治未発表作品特集」昭和二十三年十一月一日に、全文が紹介された。

『地主一代―未発表作品集―』（八雲書店、昭和二十四年四月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔付記〕「弘高校友会雑誌」第十五号所載の文末には、「四・三・十（初稿）／四・十・十八（改竄）」とある。「獵騎兵」第六号所載の「虎徹宵話」を、「改竄」したものである。

編輯後記・弘高校友会雑誌・第十五号・昭和四年十二月十五日発行・195頁・署名「小菅」

相馬正一「高校時代の太宰治（下）」（「太宰治研究」第五号、昭和三十八年十二月十九日）に、全文が紹介された。

相馬正一著『若き日の太宰治』（筑摩書房、昭和四十三年三月九日）所載、「高校時代の生活」の「七」に、全文が紹介された。

相馬正一「太宰治とその時代（初）―特高の内偵―」（「陸奥新報」第八三七三号、昭和四十五年十月十六日）に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

地主一代―第一回―座標・創刊号・昭和五年一月一日発行・30頁・署名「大藤熊太」

「別冊芸術」（第一巻第一号「小説特集」昭和二十四年三月十五日）に、「花火供養（未発表）―長篇『地主一代』の序章―」と題して、全文が紹介された。

『地主一代―未発表作品集―』（八雲書店、昭和二十四年四月十五日）に、全文が紹介された。

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕竹内俊吉「前号の小説を読む」（『座標』第一巻第二号、昭和五年二月一日）には、つぎのように記されている。

……実に小説がうまく描けてゐる。けれどもプロレタリア文学のスタイルとしてはどうであらう。早い話がこれは長篇で、いづれ小作争議など出て来るのだが、このスタイルで争議が争議らしく相当アッピールするやうに描かれるだらうといふことが案ぜられる。長篇の序曲であるから、今はこれ以上多くを言へぬ。

〔付記〕「座標」創刊号には、「序章花火供養」のみを所載。その文末には、「《序章終り》」（一九二九・十二・九）とある。「座標」については、小山内時雄^{〔綜合文芸誌〕}「『座標』細目Ⅰ」（『郷土作家研究』第五号、昭和四十年六月三十日）、相馬正一著『若き日の太宰治』（筑摩書房、昭和四十三年三月九日）所載「高校時代の生活」、小山内時雄・森英一・館田勝弘^{〔綜合文芸誌〕}「『座標』細目Ⅱ」（『郷土作家研究』第七号、昭和四十四年三月二十五日）、相馬正一^{〔綜合文芸誌〕}「『座標』とその周辺（上）——昭和初年代の文学的状况——」（『郷土作家研究』第八号「十周年記念号」昭和四十五年九月一日）、小山内時雄^{〔綜合文芸誌〕}「『座標』細目追補」（『郷土作家研究』第八号「十周年記念号」昭和四十五年九月一日）等を、参照のこと。

長篇地主一代——第二回——座標・三月号、第一巻第三号・昭和五年三月一日発行・60頁・署名「大藤熊太」

『地主一代——未発表作品集——』（八雲書店、昭和二十四年四月十五日）に、全文が紹介された。

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕川井昌平「三月号の創作」（『座標』第一巻第四号、昭和五年四月一日）には、つぎのように記されている。

大藤氏の「地主一代」は未だ漸く第二回到過ぎないので全体的には何とも云へない。地主の悪たれ口を聞いているやうで、兎に角面白い。客観的な描写を拙くなったものよりは、此の方が書くのに楽でもあるし、実用的なエフェクトもあるだらうと思ふ。出来栄から云ふと、第一回の方がいい。第二回は調子に乗って書いて下品になってゐる。

る。多分に高座的だ。もともと下品な地主の手記だから、下品であるのが当然だと云へばそれまでだが、ここでは作者が地主を憫笑しよう、憎悪しようとする意図に支配されてゐるのが、眼につくことを指すのである。従つて全体の見通しが明確さを失ひ、地主を通じて読者の前に正しく展開すべき世界が歪みかけてゐる。同時に上すべりかして、書き足りない点が出来てゐる。読過して感銘の浅い所以。

淡谷悠蔵「焦点検討―前号創作評―」（「座標」第一巻第四号、昭和五年四月一日）の「地主一代 大藤熊太」の項には、つぎのように記されている。

長篇を結末まで読まずに、批評することは、批評するものにとつても、されるものにとつても本意ないことであるに相違ない。私はただ序章及未完の第一章を読んだ丈で云ひ得る範囲にとどめ、完結を待つて更に批評したいと思ふ。／若い地主の内面曝露の小説として、必然小作爭議の解剖、描写に筆が入つて来た。そしてさうしたプロレタリア文学的素材を取り扱ふことで作者の意図すると否とにかかはらずプロレタリア文学の一作品と見られる傾きは充分にある。しかし今日云はれてゐるプロレタリア文学の範疇にあてはめて見ては勿論、もっと広い意味でのそれによつて考へて見ても、これをプロレタリア文学といふには相当問題がある。／第一に「地主一代」はこれまでのところ凡てアイロニーの効果を狙つてゐる。そのアイロニーはまた可成露骨で、相当粗雑な観方をする者にも、決して作者が地主の味方をし擁護して居るのではなく、却つて主人公たる若い地主の尤らしい自己弁護が、その淫靡な頹廢的な生活の曝露になつて居ること位は領けるが、それにしても竟畢アイロニーはアイロニーである。尠くも直截に明確に端的に迫る力には欠けて居る。更にまた作者は地主の自己弁護に思ひ切つた非道さ、たとへば一晩五十円の茶屋遊びが百円に上る物価騰貴に小作料の値上の重大な原因を主張し「どうだ之でもまだ私の小作料値上げに文句があるか？」といったり、テニスコートにするとして鯉の居る池を埋め立てたりする非道さを、あけすけに楯にとつてゐる。それで「私は始めから何一つ理不尽な振舞をなした覚えが無いのだ。」と云はせて居る。それがこ

の若い地主を恐ろしく不真面目なそれ丈に余裕綽々たるものに見せ、アイロニーの効果が逆に働いてかほどまでに馬鹿にされ侮辱され虐げられても、叛逆し得ない小作人共の愚さ無力さを嘲つてゐる（作者が）かの如くにとられる危険性がある。勿論さうした小作人共は叛逆した。しかし地主の余裕は依然として綽々たるものに見える。作者はここでも地主の負け惜みや強がりやアイロニーとして出さうと努めては居るが、争議団員二百名が決死の陣を張つて居るのを「棟木をぐいと跨いで刀を杖にずんと見渡せば、——」と云つた調子に描いて行くので、さうした追つた場面も、それに応じての急調子昂揚を伴はない。遊戯的な「話」に落ち勝ちである。ぐつと強く読者を惹く力がない。隙が見られるのである。／＼ところが、鯉の池に、地主がクレゾール液を撒き散らして、忽ち池に物凄い波のうねりが起るあたりから、お仙が下唇をキット噛みしめて、身にあまるやうな怪魚を胸にぐいぐい押しつけながら、涙一滴もこぼさずスックと立つあたり筆の生き生きとした動きは、ピツタリ作者と作の一致した境を見せて居る。／＼私はこの作の発展の方向を徒に模索することは止めよう。しかし「地主一代」は序章以来、その焦点をおそらくプロレタリア文学の範疇に到底入り得ぬところに定めてゐる。「哀蚊」を取り扱ふと「農民大会」を取り扱ふとにかかはりなくその焦点は定つてゐる。怪奇的なエロティシズムである。瀬川の話、哀蚊の話、お仙の魅力、更に前号発表分の最後——作者はその焦点に於て始めて真剣に材料と相抱いてゐる。／＼私はここでこの作品の価値を云々することはさける。ただこれまで発表された分について云へば、恐らくその取材からして連想されるプロレタリア文学とは可成隔つたところに焦点が置かれて居ることを云へば足るのである。

〔付記〕「座標」三月号には、「第一章阿鼻地獄」のうち、「巷」「式」「参」までを所載。三月号所載の文末には「▲此の章未完▼」「（一九三〇・二・一四）」とある。

長篇地主一代——第三回——座標・五月号、第一巻第五号・昭和五年五月一日発行・51頁？頁・署名「大藤熊太」

『地主一代——未発表作品集——』（八雲書店、昭和二十四年四月十五日）に、全文が紹介された。

『太宰治全集第十二卷』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕竹内俊吉「五月の創作」（『座標』第一巻第六号、昭和五年六月一日）があるが、未見である。

淡谷悠蔵「座標第一年創作総評（一）」（『東奥日報』第一三三三六号「文芸」欄、昭和五年十二月七日）には、つぎのよう記されている。

大藤熊太は、座標第一年に於て長篇を二つ書いて居る。『地主一代』『学生群』。――『地主一代』はその材料を、小作争議にとつた点で、プロレタリア文学と思はれさうな作品である。頽廃し糜爛した地主の生活を嘲笑し、諷刺する烈しさは実に鋭い。しかしまた新興の小作人階級に対する同感と好愛の感はどこにも見ることが出来ない。『地主一代』は地主の方からアイロニカルに、極端な地主の極道さを正当化し、踏みにじられた小作人を小馬鹿にして、それによる反対効果を狙ったものである。ところがどうかすると、それがそのままに滅び行く悪の華の美しさの蠱惑を持つて来る。大藤君は無論『地主一代』にせよ『学生群』にせよ、プロレタリア文学として見られることにはニタリとした笑ひをかへすであらう。ニタリと笑つて滅び行くものの運命に殉ずる感情と趣味を、大藤君は持つて居る。『地主一代』に出て来るエピソード、新婚の若夫婦の居間を夜半にそッと起き出でるぞく万年白歯の美しい婆様。地主からひどい梅毒をうつされて苦しみ悶えて死ぬ附添の看護婦、梅毒をうつすといふことは『学生群』の久保木校長のところにも出て来るが、それに伴ふ連想に類したグロテスクなエロ味が『地主一代』には殊に甚しい。（それが恐らくはまた地主といふ存在のむき出しな姿かも知れないが）大藤君のものを見る目は、その同じ角度に著しく傾いて居る。彼はその醜悪さ、その世紀末的悪趣味を自ら知つて淫するの哀しみを抱くところに彼の芸術、悪の華の芸術がある。

〔付記〕「座標」五月号には、前回につづく第一章の「四」と、「第二章奈落」の「壹」「貳」「参」とを、所載。五月号所載の文末には、「△二章終り▽」「（一九三〇・四・一二）」とある。なお、「編輯後記」（『座標』第一巻

第七号、昭和五年七月一日）で竹内俊吉は、「大藤熊太君の『地主一代』は作者が止むを得ざる外在的理由で続稿の掲載を見合はせねばならぬことになった」と記している。「長篇地主一代」は、この回を最後に未完のまま中絶した。

長篇学生群―第一回―・座標・七月、第一巻第七号・昭和五年七月一日発行・62～76頁・署名「大藤熊太」

『地主一代―未発表作品集―』（八雲書店、昭和二十四年四月十五日）に、全文が紹介された。

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

『付記』『座標』七月には、「一、偷盗」「二、若き兵士」「三、夜明け迄」の項を、所載。七月所載の文末には、「（此の項終り）一九三〇・六・一三」とある。

長篇学生群―第二回―・座標・八月号、第一巻第八号・昭和五年八月一日発行・72～87頁・署名「大藤熊太」

『地主一代―未発表作品集―』（八雲書店、昭和二十四年四月十五日）に、全文が紹介された。

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

『同時代評』『八月号創作評―宇宙的な潔白さについて―』（「座標」第一巻第九号、昭和五年九月一日）があるが、未見である。

『付記』『座標』八月号には、「四、生徒大會」と、「五、彼等」のうちの「（A）家（ストライキ第一日）」「（B）声援」までを、所載。八月号所載の文末には、「（此の項終り）」「（一九三〇・七・九）」とある。

長篇学生群―第三回―・座標・九月号、第一巻第九号・昭和五年九月一日発行・62～78頁・署名「大藤熊太」

『地主一代―未発表作品集―』（八雲書店、昭和二十四年四月十五日）に、全文が紹介された。

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

『同時代評』『淡谷悠蔵』『九月号創作批評』（「座標」第一巻第十号、昭和五年十月一日）があるが、未見である。

「付記」「座評」九月号には、前回につづく「(C) 敗慘者」「(D) 女」「(E) ルンペン(ストライキ第二日)」の三項を、所載。九月号所載の文末には、「(五、『彼等』の章終り)」「(一九三〇・八・一五)」とある。さらに「次号掲載」として、「(六、スパイ) / (七、実行委員会) / (八、第一步)」と予告されている。

長篇学生群 第四回・座標・十一月号、第一巻第十一号・昭和五年十一月一日発行・21?頁・署名「大藤熊太」

『地主一代——未発表作品集——』(八雲書店、昭和二十四年四月十五日)に、全文が紹介された。

『太宰治全集第十二巻』(筑摩書房、昭和三十一年九月二十日)に、全文が収載された。

「同時代評」大川祥八郎「十一月号創作評言」(「座標」第一巻第十二号「座標新進作家号」昭和五年十二月一日)があるが、未見である。

淡谷悠藏「座標第一年創作総評(一)」(「東奥日報」第二三七三六号「文芸」欄、昭和五年十二月七日)には、つぎのように記されている。

『学生群』も表面は最近の学校騒動に関心と熱情を持って書かれたものらしく見える。しかしその底を流れて居るものは、大藤君独自の趣味であり、態度である。関心と熱情の焦点が大藤君らしい一点に於いて定って居るのを見る。作者は、若々しい学生群の熱情の中に、決して新興の朗かさを見ない、晴々とした力の発露を見ない。人間の醜さと弱さとおしつんだ一生懸命な真面目らしさを、時にフフとふくみ笑いをする。時にそうした新興の力と一緒に得ぬ弱さを、しみじみとして嘆く。／彼の筆が、いわば学生群の敵役ともいふべき久保木校長の身の上に赴く時、その悪の中に真実の人間らしさを逸早く見出して居る。大藤君は、掲げられた真実らしさの底の真実に、しみじみとなる作家である。醜でも悪でも、真実なるものに心惹かれる作家である。そこに彼の怪奇美が誕生する。その新興的な取材の裏に世紀末的傾向を多分に孕む作家である。／『地主一代』は途中で打ち切られた。『学生群』もその半である。そして彼、大藤熊太は、今ある事件の為、生死の間を彷徨しつつあることは、知る人

は知るであらう。

〔付記〕「座標」十一月号には、「六、スパイ」「七、裏切者」を所載。十一月号所載の文末には、「十・十五」とある。「長篇学生群」は、この回を最後に、未完のまま中絶した。

俳句・連句・昭和六、七、八年頃記・署名「朱鱗」

「八雲」昭和二十三年十一月、二月号（第三卷第十一号「太宰治未発表作品特集」昭和二十三年十一月一日）に、「亀の子」と題し、小館保に与えた集印帳が紹介された。これには俳句十句と、その付記とが収められている。

伊馬春部「太宰治と俳句」（「俳句」第二卷第一号、昭和二十八年一月一日）に、俳句十句とその付記とが、紹介された。

『太宰治（日本文学アルバム15）』（筑摩書房、昭和三十年十月二十日）に、小館保に与えた句帖の一部と、「旅人」と題する連句帖の一部とが、写真で紹介された。「旅人」には、「朱鱗」の句が五句ある。

伊馬春部「太宰治と俳句」（『太宰治研究』筑摩書房、昭和三十一年六月三十日）に、俳句十句とその付記とが、紹介された。

伊馬春部「太宰治と俳句」（『太宰治研究』筑摩書房、昭和三十二年十二月十日）に、俳句十句とその付記とが、紹介された。

『定本太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十八年二月五日）に、俳句十句とその付記とが、収載された。

『太宰治（近代作家研究アルバム）』（筑摩書房、昭和三十九年六月二十日）に、小館保に与えた句帖の一部と、「旅人」と題する連句帖の一部とが、写真で紹介された。「旅人」には、「朱鱗」の句が五句ある。

『俳句研究』昭和四十二年四月号（第三十四卷第四号、昭和四十二年四月一日）に、「太宰治の俳句」と題し、小館保に与えた句帖の一部が写真で紹介された。

『没後二十年太宰治展』（毎日新聞社、昭和四十三年六月十八日）に、「旅人」と題する連句帖の一部が、紹介された。

これには、「朱鱗」の句が五句ある。

『写真集太宰治の生涯』（毎日新聞社、昭和四十三年九月二十五日）に、「旅人」と題する連句帖の一部が、紹介された。これには、「朱鱗」の句が五句ある。

〔付記〕一部全集収録。「俳句」については、伊馬春部「太宰治と俳句」（『太宰治研究』筑摩書房、昭和三十一年六月三十日）、桂英澄「桜桃忌」（「俳句研究」第三十四卷第四号、昭和四十二年四月一日）、玉置邦雄「俳句」（『太宰治辞典』清水弘文堂、昭和四十七年六月二十日）等を、参照のこと。

ねこ・昭和七年十一月、二月頃記・署名「黒虫俊平」

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十三年九月二十日）に、全文が収載された。

「太宰治全集月報12」（筑摩書房、昭和三十三年九月二十日）に、全文が写真で紹介された。

『没後二十年太宰治展』（毎日新聞社、昭和四十三年六月十八日）に、一部が写真で紹介された。

『写真集太宰治の生涯』（毎日新聞社、昭和四十三年九月二十五日）に、一部が写真で紹介された。

〔付記〕「ねこ」の原稿については、『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十三年九月二十日）所載の、「年譜」の「昭和七年（一九三二）」の項と「後記」とを、参照のこと。

〔後記〕この稿を草するに際して、つぎの諸氏、諸図書館、諸社の助力を得た。記して謝意を表する。

石上玄一郎氏、小山内時雄氏、小館保氏、小野正文氏、柿崎守忠氏、菊池二三子氏、柴田小三郎氏、関井光男氏、相馬正一氏、高木恭造氏、高橋彰一氏、津川武一氏、津島美知子氏、東郷克美氏、中村貞次郎氏、葦沢謙氏、野村亨氏、平岡敏男氏、藤田金一氏、三上斎太郎氏、森下志郎氏、渡辺惣助氏、青森県立図書館、青森県立青森高校図書館、弘前市立弘前図書館、弘前大学附属図書館、東奥日報社、陸奥新報社。

Shoshi Yamanouchi

**A Bird's-Eye View of the Works Composed by
Osamu Dazai
(1922~1932)**

Résumé

The present collection comprises all of what Osamu Dazai (1909~1948) ever wrote and his utterances recorded at the meeting of joint criticisms of contemporary literary works or round table talks, placing emphasis on recording how these writings and utterances were sent to print.

At the same time, efforts were made to include descriptions of those contemporary magazines, etc. which either printed the late writer's works, or just offered their pages to introduce them in part until the time when they were eventually incorporated in the "Complete Works of Osamu Dazai", this being for the purpose that this edition may possibly help those desiring to make reference to the said "Complete Works" in relation to certain paragraphs or passages in the original writings still in the form of manuscripts.

Space was given also to such criticisms which appeared concerning Dazai's literature, confining them strictly to such portions as directly dealt with the late writer's works.

In "Additional Note", allusion was made to such works of Dazai as fragmentary publication only has so far been made and those which failed to be printed in "The Complete Works". It also includes "notes" and "remarks" related to the works as well as those connected with their first publication and other utterances insofar as they related to the unique literature of Dazai.

It is noted, moreover, that Osamu Dazai is recorded to have written quite a lot of literary works, the period of his literary activities ranging from when he was a boy of 13 years old to when he grew up into a young literary aspirant of 23 years old.